

今月の



## 隣に伝えたい 新たな言葉と概念

### 【キノホルム】

英 chionoform

キノホルムはスモンの原因となった薬剤である。スモンは、集団発生する奇病として1960年代半ばから注目され、患者数が増加するにつれて社会問題にまで発展した。その原因として当時はウイルス説が有力視されていた。そんな中で、スモン患者には特有の緑舌や緑尿がみられることが報告された。緑尿を分析した結果、緑色物質の本体がキノホルム三価鉄キレート化合物であることが判明し「キノホルム原因説」が浮上した。続いて行われた疫学調査によりキノホルム内服とスモン発症の関係が濃厚となり、これを受けて厚生省よりキノホルム剤販売停止措置が出された。販売停止後スモンの新規発症は激減しキノホルムが原因であることが裏付けられた。

キノホルムは、1898年にスイスのバーゼル化学工業により皮膚殺菌消毒薬として開発された。1933年にアメルバ赤痢に対する有効性が報告され、34年には経口用製剤が市販された。35年にアルゼンチンの医学雑誌に、下肢の麻痺、激痛を伴う結腸炎といったスモンに類似した副作用の報告が既になされている。日本が輸入を開始した当時は劇薬に指定されていたが、1939年に指定が解除となっている。欧米に比べて日本では服用量の規制が緩く、薬害を招いた原因の一つとなった。1961年の薬局方第七改正の解説には「内服された大部分は吸収されることなく腸管を通過する」との誤った記述が見られ後に安全神話を生んだと考えられる。キノホルム剤は整腸剤、止痢剤として常備され服用されており、市販薬としては170種類もの製剤があった。あまりにも浸透しすぎていた薬剤ゆえに警戒感が薄れていたとも考えられる。

(国立病院機構鈴鹿病院 久留 聡)

本誌457 pに記載